

げることが出来る。『靈樞』経脉に「膀胱足太陽之脉、起於目内眦、上額、交巔……」とある通り、上崑崙、すなわち百會（巔）は下崑崙に通じていること臨泣、竅陰の例と同じである。藤堂明保『中国語音韻論』によると「k~l~型」の連綿字は、丸いもの、廻転、空っぽなどの基本的意義をもつ」とされるが、「崑崙」の原義は弁髪を丸めて頭に巻いたチベット系部族（羌）の称ではなかったか。やがて「太虚」（空っぽ）に通じる神話的山名となり、古地図に瓢箪（壺盧、やはり「k~l~型」の形に描かれる河源とされ、人体にあつては「丸い」頭とされたものであろうか。

（日本経絡学会）

27 古典にみる砭鍼の臨床的意義について

1) 坂本 秀治・2) 市川 太郎

石ばりの最初の記述は、紀元前十一世紀から十二世紀頃の資料を集めると言う『山海経』とされる。中国医学における五つの治療法の起源を五つの方角に配置している『素問』異法方宜論篇において「砭石は東方より来る。従つて東方に配置される」と説述している。また「血氣形志篇」王水注によれば「石は石鍼を謂う。即ち砭石なり」としている。

一方ニードルは砭の用語について、その著『中国のランセット』の中で「辞書編纂者により、いしばり」と言う奇妙な語が与えられることが多かった」と言っている。

有名な神医「扁鵲」は砭石に通じ、扁鵲とはまた「石鍼」をさすこと、ないしは「石鍼の神の名」であるかもし

れぬ公算が大きいとする森田氏の説にもあるように、名称は知られていても実体は全く知られていないようである。

『本草綱目』にも「砭石別名砭石」とあり、砭石に關して、「知る者」無しと述べるに留まる。この見解は以後『和漢三才図会』にも引き継がれている。

以上に見られるように、古典でも名称に知られるのみで実体の判らない「砭石」とはどのような石かにつき、東洋的立場に立つて文献的考察を加えてみた。

古代中国で、針にいかなる種類の「石」が利用出来たかにつき、ニーダムは想像してフリント、マイカ（雲母）、石綿、及び玉等を挙げている。また『和漢三才図会』では青石「砭」（といし）の記載が見られ、これはその条によれば蒼色で「青砥」と言い、山城の産で上品である。丹波及び防州岩国産がこれに次ぐとしている。

その他、貴金属や金、銀を細かく打ち延ばしたであろうことも考えられる殷代の民族はまた竹ヒゴを作ったり、骨や角で尖った楊枝を針治療に用いたりしたことが想像できらる。

一般には砭石と称されるものは、矢じりからとったもの

と言われている（鍼灸重宝記）。

弥生時代の石鏃には打製と、磨いて作る磨製がある。この頃の石器で稲を摘むための穂摘み用石器（石包丁）、旧石器時代のナイフ型石器、尖頭器などや石鏃が吉野ケ里遺跡から発見されている。そして恐らくはサヌカイト原石から簡単に作られたと想像される。石ばりを砥石で磨くことも或は砥石そのものであることも考えられる。

古典の中にも例えば扁鵲の医話（戦国策）に「厲鍼砥石、以取外三陽五会」とか、また『素問』宝命全形論の「砥礪鋒利」して以て其の小大の形を制して病と相当つ、『塩鉄論』五十六申韓にみる「鍼石」と『礼記』卷十一の「砥礪廉隅」等々このことを裏付ける要素は多い。

伝説、神話を多く含んだ中国古代の地理書『山海経』は奇想天外な古めかしさを感じさせるが、この『山海経』にも陰陽面から見るとき一定の原則（規律）が見出されると言う。この経の原則に従えば砭石は陰陽両面を代表するに對し、箴石に關して「高氏の山」、「鳧麗の山」に表されるように陰面を代表する。

箴石同様陰面に表す顕著なものとして「鉄」が挙げられ

る。これに対して、砒石は時に陰面を代表するとは言え略陽面を代表するとされる。

(1) 関西鍼灸短期大学

(2) 南小岩接骨院

28 東京歯科医学専門学校臨床歯科学

叢書の書誌学

森山 徳長・○春日 芳彦

東京歯科大学百年の歴史の過半を占める東京歯科医学専門学校の教科書は、まず新纂歯科学講義（明治四十～四十四年）、および歯科学講義（大正元年～六年）と連続して刊行された。この二種類の歯科講義録はその合本が出版された。その後の書下し教科書としては歯科学叢書として（大正十五～昭和十九年）にかけ十五編発行された。

また大正十四年から主として花沢鼎により、臨床歯科学叢書として数編の単行本教科書が順次発行された。

勿論その他にも多くの書下しの単行本が発行され、それらが混然一体となり第二次大戦前の本学教科書体系をかたちづくった。

本叢書は第一巻が大正十四年六月発行され、その緒言に